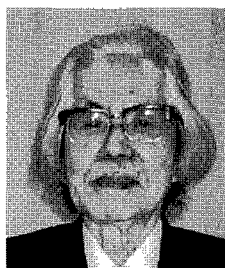


海野一隆先生 (1921-2006) を悼む

海野一隆先生 (大阪大学名誉教授) は、去る2006年5月4日、糖尿病にて入院治療中のところ、逝去された。享年84歳。前年から糖尿病による視力の衰えをうったえられ、4月18日に入院された時には、片足の切断が必要なほど悪化していたという。



(2004年10月)

先生は第七高等学校を経て京都大学文学部に進学し、1945年にこれを卒業された。岐阜県大垣中学校などでの勤務ののち、1948年に大阪第二師範学校教員となり、大阪学芸大学講師、助教授をへて、1963年に大阪大学教養部に助教授として着任し、人文地理学を担当された。1971年に教授に昇任し、大学院文学研究科の東洋史の講義も担当された。1985年に大阪大学を定年退職したあと、1991年まで大阪明浄女子短期大学に勤務され、その後も盛んに研究・執筆活動に励んでおられた。1997年に勲三等旭日中綬章を受けられたほか、ご逝去にあたり従四位に叙せられた。

先生の研究の中心は東洋地理学史で、東アジアの地図史、地図をめぐる東西交渉史についてとくに精力的に推進され、1963年には仏教系世界図に関する室賀信夫博士との共同研究により、国際地図史学会の「イマゴ・ムンディ賞」を受賞された。また1979年以降は室賀博士の後任として同学会の役員を継続してつとめられた。海野先生の国際的活躍を象徴するのが、*The History of Cartography*, vol.2, book2 所収の *Cartography in Japan* (1994年、全132頁) で、ひろく海外の研究者に引用されている。

国内でも人文地理学会の評議員・理事、日本国際地図学会の評議員のほか、財団法人東洋文庫の研究員などをつとめられ、歴史地理学会には1962年に入会し、『歴史地理学』117号に室賀博士の追悼文を書かれている。

海野先生の経歴やお仕事については、すでに久武哲也氏の追悼文など¹⁾があるほか、著作目録とその解説²⁾の刊行も予定されているので、

くわしくはそれを参照していただくことにして、以下では目録の準備過程などで判明した海野先生の著作の特色および遺著を中心に紹介したい。

よく知られているように、先生は80歳をこえてから『東西地図文化交渉史研究』(清文堂、全747頁、2003年1月)、『東洋地理学史研究 大陸編』(同、全373頁、2004年2月)、『同 日本編』(同、全663頁、2005年7月)と大部の書物をたてつづけに刊行され、周囲を驚かされた。中国で繁体字版だけでなく簡体字版の翻訳まででた『地図の文化史』(八坂書房、1996年)、意表をつく展開で読者をひきつける『地図に見る日本』(大修館、1999年)にわかりやすさや親しみやすさを感じていた筆者は、くわえてこの三部作ともいうべき大著の難しさにも驚くこととなった。三部作は、いずれもモノグラフ集ともいうべきもので、短い「序」につづいて大まかにグルーピングされた論文がならぶという形式をとる。また索引や挿図一覧はととのっているのに、イントロダクションや結論を欠き、内容が学術的に高級なだけに、どのように読み進むべきかとまどってしまうわけである。『東西地図文化交渉史研究』の「序」で先生は、「本書は……ただひたすら、先学が解明しなかった謎を解きたくて、資料の探索、文献の渉獵に悪戦苦闘して辿り着いた結果を書き留めているに過ぎない。従って、東西地図文化交渉史という観点からすれば、必ずしも論題の選択において、適切とは言えないものがあるかも知れない」と、はじめからそうした書物を意図されていたことを示されている。

こうした三部作を海野先生のお仕事の到達点と理解するのは容易で、当初筆者もそのように考えていた。しかし、先生の遺著のひとつである『日本人の大地像—西洋地球説の受容をめぐって』(大修館、2006年12月刊)をご子息の海野隆史氏からお送りいただき、読み進めるうちに、この考えは早計と判断するに至った。この書物は、三部作にみられるさまざまな論考の成果を各所に配置し、大地が球体であるという学説の日本への到来からはじまり、それをめぐる、儒者、神道家、仏僧、国学者などさまざま

な知識人の議論を、しっかりした書誌学的研究を背景に追跡する大きなストーリーの思想史である。一般むけのスタイルではあるが、実質的には高級な学術書で、先生が最終的にめざしていたものがこうした叙述であったと仮定すると、三部作のスタイルがなんとか理解できる。つまり三部作にみられるモノグラフは、より高いレベルの思想史に至るステップということになるわけである。

大阪大学 OG の要木佳美さん（東洋史学）によって現在編集が進められているもうひとつの遺著『地図文化史上の広輿図』も、やはり大きなストーリーをもつ。学位論文にすることを予定されていたというこの書物は、中国地図史の大きな画期をつくった広輿図の諸版、その系譜、さらにそれが示す地理情報の西欧の地図への反映をあとづける。

この書物を構成する多くの章や節は、1960～70年代に発表された論文をもとにしているが、いずれも三部作には収録されていない。また書きおろし部分にくわえ、上記論文の修正のために準備された原稿も多く、そのかなりの部分には室賀博士のコメントが付されているという点でも注目される。海野隆史氏によれば、病状が進んだ段階で、先生はもう2年ほど本書をまとめる時間が欲しいとおっしゃっていたとのことで、『日本人の大地像』と同様に大きな展望を示すものとなろう。またこのように見てくると、海野先生はさらに別の大きなストーリーを構想されていたのではないかと思えてくる。

2006年11月4日に阪大東洋史の関係者とともに開催した海野先生を偲ぶ集い（待兼山会館）に駆けつけてくださった方々のうち、斯波義信先生（東洋文庫理事長・文化功労者／東洋史）は、関西ならではの海野先生の独特の学風を、川村博忠先生（東亜大学／歴史地理学）は、海野先生とともに参加された世界各地での国際地図史学会の思い出を、石山洋先生（元国立国会図書館・東海大学／科学史）は地図展や洋学史研究での海野先生との交流を語ってください、私たち後進にもたいへん有意義であった。またあわせて、海野先生の広範なお仕事を継承することがいかに難しいかも、あらためて痛感された。

海野先生は弟子を養成しやすいポストに就かれたことはなく、また阪大東洋史の関係者によれば、その大学院生を対象におこなわれた講義も遠慮がちであったという。先生のお仕事を継承するには、まず先生の書きのこされたものを理解するところからはじめる以外にないのである。

海野先生が収集された書籍、古地図、資料類は国際日本文化研究センターに収蔵され、その目録が準備されている。上記『地図文化史上の広輿図』の編集刊行にあわせて、海野先生のお仕事の継承にむけた作業の一環として、関心をもっていただきたい。

今回、海野先生の著作目録を準備しながら、先生のお仕事の広さと深さにくわえて、高齢になられてからのさかんな著作活動に圧倒される思いであった。また一般書の刊行が先行し、のちになるほど学術的に重要な書物が刊行されるという順序は、先生のお仕事が学界に理解されるに際して、かならずしも良好でない条件をつくりだすことになったと思われるが、これもふくめて先生は独自のスタイルをお持ちであったことをつよく感じる。先生が辞世を生前に発表なさり（『ちりもつもりて』、1992年）、ご自分の戒名をきめられていたこともその一環と考えられ、このいずれにも表明されている学問への情熱とその持続こそが、先生の著作活動を支えていたことがうかがわれる。病に倒れられてからもなお、お仕事の完成に全力を尽くされた海野一隆先生のお姿をしのび、謹んで哀悼の意を表します。

（小林 茂）

【注】

- 1) 久武哲也「東洋地図学史の碩学 海野一隆先生のご逝去を悼む」、地図 44-3, 2006, 巻頭 1-2頁。小林 茂「海野一隆先生のご逝去を悼む」、地図情報 26-2, 2006, 41頁。
- 2) 久武哲也・堤 研二・鳴海邦匡・小林 茂「海野一隆先生の研究業績とその地図学史的意義」、大阪大学大学院文学研究科紀要 47, 2007, 185-234頁。